

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-9

まんじりともしないので男の寝息を聞いていた麻里子は、暗がりでも目を潤ませていた。

今までは“愛、とか“恋、とかいう言葉に困惑とおさまりの悪さがないまぜになって居たたまれない気持ちになってしまう麻里子だったが、辰巳のなせる業なのか、嫌悪感すら覚えていたこの言葉を胸底にストンと落とすことができた。

心的外傷や孤独をろ過しきった麻里子は下腹に騒めきを抱えながらも安らいでいた。

明日の国民の休日にセッティングされていた接待ゴルフをパスするわけにはいかなかった辰巳は麻里子に事情を話して、下膳に来た仲居に6時半の朝食を頼んでもらっていた。

東松山インターから約10分の所にある嵐山カントリークラブで10時スタートだったので、ホテルを7時半に出れば9時前には到着できる道程だった。

ふたりともゴルフの話題には触れないようにしていた。

忙しい朝の時間の流れの中で後朝の別れをしたほうが、むしろ後ろ髪をひかれずに済むと麻里子は思うことにした。

日の出時間の5時半を過ぎても眠りは訪れなかった麻里子は、部屋のあちこちにしみ込んだ夜の営みの名残りを黎明が消し去ってしまうのを待って、急いで朝湯に入った。

朝食をとりながら、新商品開発を具体化したいので、今度神戸に来るようにと辰巳は少し改まった口調で言った。

「心配なんかなくていい」と辰巳は麻里子の気持ちをくんだように言った。

「ありがとうございます」と女は言いつつ、男のあとが残る身体を引きずっていた。

「神戸に行ったことは？」

「京都から先はありません」

「それは良かった。案内しがいがあるね」と辰巳は言って、朝食後に麻里子がいれたお茶を美味そうに啜った。

「私の方から連絡することがあってもかまいませんか？」

「もちろんだとも。そうだ、携帯番号を交換しておかなければいけないね」と辰巳は口元を緩めて言った。

ホテルの正面玄関に黒塗りのトヨタセンチュリーが横付けされていた。

お抱え運転手が後部ドアを開けると、辰巳は当たり前のように乗り込んだ。

J課長が運転する白のプリウスが迎えに来るものと決めつけていた麻里子は、改めて辰巳のすごさを痛感させられた。

複雑な面持ちを押し隠すつもりで傍らの支配人に世話になったことへの礼を言って、頭を下げた。